続「カーブル」と「カブール」

稲葉　穣

田中雅一教授を班長として、本年度よりスタートした共同研究班「複数文化接触領域の人文学」では、参加者による研究発表とテキスト会読を並行して行っている。研究発表の方は複数文化が接触する領域＝コンタクト・ゾーンに関連する様々なテーマにかかわる報告と討論がなされ、私のように普段は文献にかじりついている人間にとっては大変刺激的な研究機会となっている。

一方テキスト会読の方は、異文化の中を旅した人々の記録から、文化認識や文化接触の様相を読み取るべく、旅行記を題材としたい、という班長の意向のもと、とりあえず一九世紀前半のイギリス人外交使節アレクサンダー・バーンズによるカーブルへの旅行（一八三六―三八年）の記録を読み進めている。このバーンズの旅行記はその名も *Cabool* というタイトルである。もちろんカーブルのことなのだが、我が国においてこの都市の名前が一般に「カブール」と写され、それがどこに由来するのかという点について、数年前にこの所報に短い文を書いたことがある（所報人文第四九号）。そこでは江戸末期の文献に「加布利」と書いて「カブユル」と、また「喀布爾」と書いて「カビユル」というルビが振られている、というところを確認するまでで力尽きたのだが、その後少々新しい知見を得た。近藤治先生の『東洋人のインド観』（汲古書院、二〇〇六年）を通じ、すでに一九世紀初頭、山村才助の『印度志』中に「加補児」に「カブユル」というルビが、また「加補爾」に「カビユル」というルビが振られていることを知ったのである。近藤先生によれば、山村の『印度志』は、ヨハン・ヒューブナーのドイツ語地理書のオランダ語訳『ゼオガラヒー』のうち、インドに関する部分の翻訳紹介であるが、そこには「加補爾（カビユル）、一名カホウル（Caboul）といふ。」とある（『東洋人のインド観』一二一頁）。残念ながら私にはオランダ語の知識がないので、当時オランダ人が「Caboul」をどう発音したのか正確にはわからないが、現在のオランダ語であれば「カバウル」といった感じだろうか。ただし外来語としてなら「カブール」と読まれた可能性はあろう。『ゼオガラヒー』の原書はドイツ語であるわけだが、ドイツ語で外国の地名を「Caboul」と音写することは想像しにくいから、やは

りフランス語系の音写が引き写されたものなのかも知れない。そもそもイギリス人たるバーンズが、英語らしからぬ「Cabool」という表記を用いてることからも、ヨーロッパにおいて当時何か定番の表記があった可能性もある。

いずれにせよ、どうもオランダ語の段階ですでに「カブール」という発音が成立していて、それが日本でも取り入れられた可能性が出てきた、というところで再び紙数が尽きた。ヨーロッパ諸語においてもともと「カーブル」がどう写されたのか、および日本語の「カブユル／カビユル」というルビはどこに由来するのか、といった疑問はまだ残っている。何かわかったらまた折を見て書いてみたい。

近代古都研究雑感

高木博志

京都の枝垂れ桜は、京都にあるだけで雅である。

二〇〇三～五年度までの「近代京都研究」班（研究代表、丸山宏名城大学教授）をひきつぎ、「近代古都研究」班を二〇〇六年度よりはじめた。丸山班は、最後の国内客員の研究班であった。客員研究班という制度は、人文研の共同研究会を外部に開く意味でも、意義深かったので、なくなったのは惜しい。

「近代京都研究」班では、歴史学・造園史・建築史・美術史・歴史地理学など学際的に研究がおこなわれ、とくに京都が「古都」であると「歴史」や「伝統」のなかで表象された像と、政治的・経済的な都市の現実との異同が問題となった（伊従勉編『近代京都研究―みやこから一地方都市への軌跡』二〇〇一年）。その意図は、二〇〇五年度の人文研夏期公開講座を、「古都イメージの近代と現実」という統一テーマで、「近代京都研究」班が担当したことからも明らかである。

新しく「近代古都」という研究課題を学際的に取り組む際に念頭においたことは、「古都」の語の意味である。「古都」という語が一般化し、京都や奈良がそれを自己表象するようになるのは、一九六〇年代の高度経済成長期以降のことである。「古都」とは、天皇がいなくなった旧都（もとのみやこ）であると考える。たとえば「みやこ」という語は本来、「帝王ノ住マセ

ラルル地ノ称」（大槻文彦『言海』一八八九年）であったのが、現行の『広辞苑』では首都や都会の意味も加わり、近現代を通じて語義が拡大している。これは一九六六年に制定された古都保存法が対象とする「古都」が、既定の京都市・奈良市・鎌倉市・斑鳩町・明日香村・大津市などから地方城下町までをその射程に入れつつあることも、こうした語義の拡大に照応するだろう。

しかも「近代京都研究」班で高久嶺之介氏が論じたように、一貫して京都府や京都市は、近代を通じて工業都市を目指していたのだ。したがってある意味で、かつての「歴史」や「伝統」に頼り文化財化した「古都」を売り物とする施策は新しいものといえる。たとえば京都市は昭和初期に七十万人を超える大都市であった一方で、奈良は同時期に県全体でも十一万人余の人口にすぎなかった。大都市の京都と田舎の奈良という異質なものが同じ「古都」という概念でくくられるようになったのは、昭和期になって大衆社会状況や観光の隆盛などを通じてであろう。

もう一つ思っているのは、古都研究に取り組む際に、牧歌的な「古都」礼賛はやめたいということである。平安遷都千二百年記念や昨今はやりの京都検定などで賞揚される、雅、国風、貴族性、町衆、幕末の志士など歴史貫通的な京都イメージは、近代に構築されてきた表象であり、相対化することが学問的に必要であると思う。日本文化と奈良・京都の地域文化とをストレートに結びつける施策・情報が満ちているなかで、たちどまって辛口の共同研究があってもいい。

といいつつ最近の私のためらいは、近代に画一化された神社景観に身をおくとほっとし、文化財保護制度で囲い込まれた国宝・東寺帝釈天像を端正と思い、平安神宮の紅枝垂れ桜を見にゆく自分についてである。近代の文化は前近代の上に重層し変化するものであるが、近代の政治や学知を媒介に、新たに創り出された来歴はしっかりと見極める必要があるだろう。そうしてできあがった文化を楽しみ愛でる自分がいてもまったく問題ないのではないか。そして一方、地域の文化は、別にナショナリズムと結びつく必要もないだろう。

ケンジントン公園の森と栗鼠

辻　正博

平成十九年度から始まった「西陲發現中國中世寫本研究」班に参加させていただいている。研究の対象となるのは、中央アジアから中国西北辺境におよぶ地域から出土した古文書である。内容は、仏教をはじめとする経典の写本から私信・帳簿の類に至るまで多岐にわたる。班員おのおのが自らの問題関心にしたがって関係文書を取り上げ、研究発表を行っている。研究班を始めるに当たって、高田時雄班長から「年次報告」を刊行する旨が宣言されたが、お陰様で十九年度は十名の班員の執筆にかかる報告書を『敦煌写本研究年報』として世に問うことができた。

研究班の末席に名を連ねるわたくしは、中国法制史を勉強する身であり、「敦煌学」や「トルファン学」の専家ではない。ただ、「敦煌文書」の発見以来、一貫して研究拠点の一つであり続けた京都で東洋史を学んだ関わりから耳学問として敦煌文献に関心をもち、大学に残って中国史研究を続けてゆく中で、折々に文書を読む機会をもつことができた。研究などと呼べた代物ではないが、それらを扱った小文を草したこともある。このたびの研究班参加は、正面から敦煌・吐魯番文書に取り組む機会を与えていただいたものと感謝している。

今頃になって「敦煌文書」かと訝られる向きがあるかも知れないが、西域出土文献研究をめぐる環境は目下大きな変化のただ中にある。一昔前までは解像度の低いマイクロフィルムを見るのが普通であり、鮮明な写真のある文書はごく一部に過ぎなかったけれども、今ではＩＤＰ（国際敦煌学プロジェクト）のデータベース等で高解像度のデジタル画像を容易に入手することができるし、主要研究機関が所蔵する文書であれば、中国で出版された図録で写真（大半がモノクロ）を見ることができる。

その代償という訳でもあるまいが、以前は比較的容易であった文書原本へのアクセスは制限されつつあると聞く。ちょうど十年前、一年間にわたって英国およびフランスでの在外研究を許された折りには、大英図書館・フランス国立図書館のご厚意により、こちらが閲覧を希望するほとんどすべての文書について原本調査を行うことができた。一日あたりの閲覧制限は一応設けられていたものの、個々の原本について普通に観

察している限りその制限を超えて閲覧する時間的な余裕など無かった。ロンドンもパリも、他に見に行きたい場所は無数にあったけれども、あの「宝の山」に勝るところはあるまいと思っている。

夕刻に大英図書館（当時はテムズ川の南岸、ブラックフライヤーズにあった）を後にして下宿に帰る途中、特に日の長い時期にはケンジントン公園に立ち寄ることもあったが、そこには大都会の真ん中とは思えぬほどの広大な芝生と森が拡がっていた。時に栗鼠の姿を見かけることがあり、木の実を前足にもって佇む姿に心が和んだものである。聞けば、栗鼠は団栗を森のそこここに埋めておき、後で取り出して食べるのだとか。取り出し忘れた実は、春に芽を出して若木となるそうである。研究班参加を契機に欧州で集めた調査資料が一つでも多く芽を出してくれればと思う。